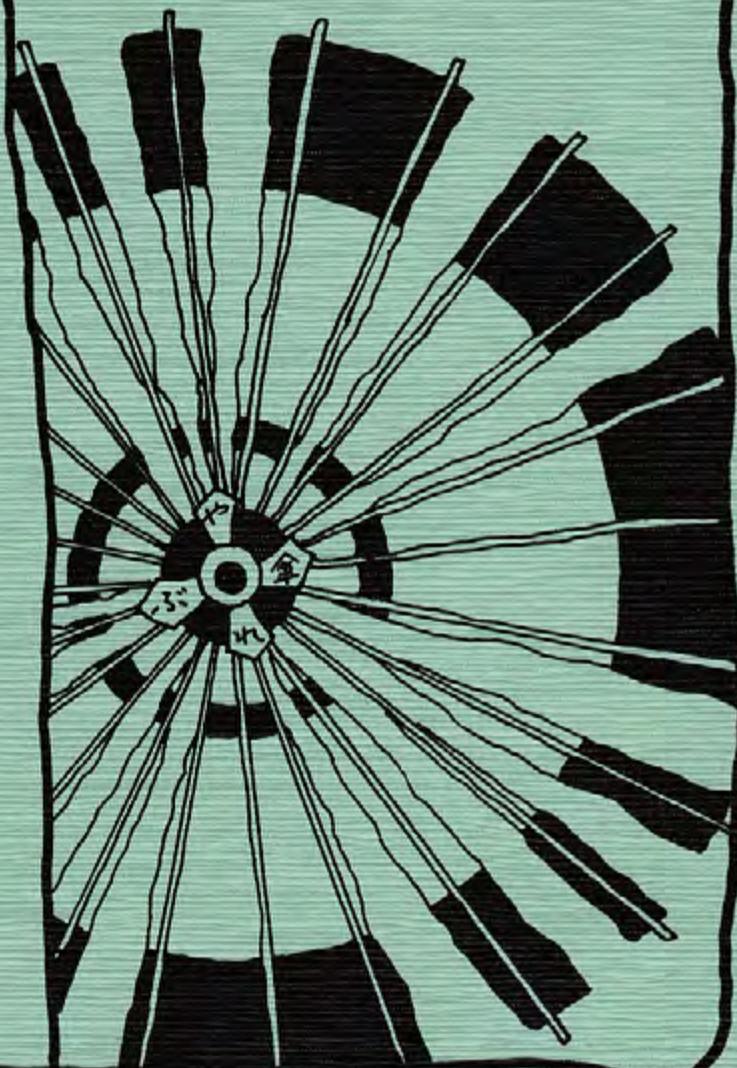


やぶれ傘



一〇〇〇号

二〇一八年二月

| | |
|-----------------------------|--------|
| 一本の切山椒の香なりけり | 根橋宏次 |
| 看板に冬の日のこる蕎麦どころ | 大島英昭 |
| 手の上の海風は生きてゐるらしい | きくちきみえ |
| 凍て蝶を見てゐるやがて動くかと | 藤井美晴 |
| 手袋の手に飴玉を貰ひけり | 廣瀬雅男 |
| 何もなき冬の更地にもぐら塚 | 瀬島酒望 |
| 寒夕焼行 ^{みゆき} 幸通りの正面に | 丑久保 勲 |
| お手玉のひとつに鈴が冬日向 | 青谷小枝 |
| 捨て舟の中に細波春隣 | 天野美登里 |
| 大根の葉をわしづかみ二三本 | 白石正躬 |
| 欠伸する人と目の合ふ冬の暮 | 小山陽子 |
| 年の暮こゑをかけつつ位牌拭く | 有賀昌子 |
| 寝転んで枯葉だまりの香りかな | 渡邊孝彦 |
| 白息に眼鏡の曇るそんな朝 | 安藤久美子 |
| 人日のリハピリ室の混み合へり | 菊池洋子 |

抄 集 句 傘 ぶ れ や
選 夫 紀 崎 大

| | |
|------------------|-------|
| 千両を活けてひととせ終へる妻 | 秋山信行 |
| 公園のベンチに在れば冬の蠅 | 松村光典 |
| 岩がきは二個で一皿障子鳴る | 奥田温子 |
| 演壇の隅にストープ点いてをり | 神山市実 |
| 袖子の実のくたくたになり終ひ風呂 | 黒木東吾 |
| 鳩のみの静かな広場冬紅葉 | 齋藤朋子 |
| 寒桜天然石の椅子並ぶ | 中島和子 |
| 墨の香を聴きつつ賀状書きにけり | 貫井照子 |
| 初冬の山よりスカイツリー見る | 野口希代志 |
| 立冬や雑魚のあめだき売る露店 | 萩原溪人 |
| 高原に牛点々と秋の風 | 広瀬 济 |
| 澄み切つて闇澄み切つて寒の月 | 武藤節子 |
| 裕道を白く照らして冬の月 | 湯本正友 |
| 鳥影に雪見障子をそつと開け | 石原健二 |
| 悴んで切れた電球振つてみる | 岩藤礼子 |

千 両

秋山信行

コンサートロビーにポインセチアかな
西伊豆に鯨の開きを買ふ小春
枯蓮いつとはなしに雨のきて
冠雪の男体山に雲ひくく
母のもの屑と捨てたる師走かな
千両を活けてひととせ終へる妻
幼子のたどたどしくも御慶かな
窯変の盃に満たさる年の酒
初空を追ひつ追はれつして雀
何んとなく畑にでてみる三日かな

冬の蠅

松村光典

わが庭の冬を彩る夏みかん
冬晴るる影と日向とくつきりと
公園のベンチに在れば冬の蠅
北風に幟はためくラーメン屋
松飾り少なき道を歩きけり
元日のからす眺めて湯に浸かる
練馬より遙かに雪の富士拝む
山茶花が伊豆の下田で花盛り
白波の立つ海を背に天城越え
大寒の小田原の海きらきらと

寄せる波途中で砕け冬の月
ゆきずりの社に祈る年の暮
納めては新たな破魔矢持ち帰る
変はらずに味ある賀状来たりけり
門口で済まず奥へと年賀かな
新年会おさなごに菓子配りをり
年と年齢の差に工夫をこらすお年玉

大野芳久

根雪踏み信号待ちの交差点
幼子のけん玉の音冬ぬくし
果実煮る匂ひは甘し雪催ひ
冬木立見上げる空に雲の無く
帰り花喪中はがきを受け取りし
雪の夜のジグソーパズル完成す
着ぶくれて分別ゴミを出しに行く

岡田香緒里

奥田温子

猫つぎつぎ庭の紅葉は真つ赤です
野沢菜の漬菜あをあを冬に入る
いつも来る猫のまだ来ぬ花八つ手
ぬつと出ていつもあるかに冬満月
岩がきは二個で一皿障子鳴る
寄せ鍋の蓋まだまだと押さへられ
追加する酒は地酒で熱爛で

神山市実

銀杏の臭ひ家までついでくる
鯖雲を道行く人と見上げたり
演壇の隅にストープ点いてをり
青木の実地にすれすれにひとつだけ
街中^{まぢなか}に金次郎像年暮るる
戌年の明けて変はらぬ犬の朝
年玉を息^こ子よりもらひて神棚へ

亀岡睦子

小春日や双子のねむる乳母車
冬晴れや落慶の塔そびえたち
水桶に初氷見る朝まだき
築地堀道行く人の冬帽子
霜柱人の通らぬ墓の道
健康に柚子湯が効くと長湯する
庭の花活けて我が家の春を待つ

上林富子

ふる里の太き切干届きけり
落葉松落葉窓の彼方に浅間山
豆腐買ひに隣町まで冬夕焼
マネキンの付けたるマフラー買ひにけり
トランプの子に負けぬたる小正月
厨窓雪明りして豆煮あぐ
先生に名を忘れられ冬すみれ

冬日向好きなカップでひと休止
起き抜けにまづ湯を沸かす寒き朝
盛塩で浄めし店に大熊手
寂しさも傍らに在り年用意
古稀の人寒紅を引きコンサート
うら寂しほんの少しのごまめ炒る
読初はギリシヤ神話にお茶添へて

木村瑞枝

柚子の実のくたくたになり終ひ風呂
演題は「呆け」年末の講習会
寒風や女とび職混ぢりゐて
寄せ鍋や赤と白との味噌を混ぜ
大きくは望まぬ変化去年今年
年明けの寝惚け眼の一句かな
土手下に穂絮を着けし枯芒

黒木東吾

黒澤次郎

あつけなく散りおほしたる金木犀
雨戸練れば朝日のなかに櫺紅葉
力石をかこんで石露の花盛り
冬草の青々としてありにけり
手をひいて負ひて抱きて初詣
ねんごろに祈る祠の初明り
久々に五位鷲に遇ふ冬の川

小池一司

残る葉は震へて北風の吹き止まず
短日の散歩切り上げ縄暖簾
庭手入れして千両の際立てり
中天に赤き月あり残る雪
底冷えの星空よぎる夜行便
鏡花道暗がり坂の雪催ひ
犀星を育てし寺に雪しまく

小巻若菜

病む夫の言葉聞きゐる冬紅葉
夫寝ねてひとり湯船に一葉忌
演目は忠臣蔵の師走かな
はらからに病む夫笑顔冬日さす
夫逝きて子と酒を酌む初日差
四日月はやばや落ちて柚子湯の香
天窓を白き雲ゆく初稽古

齋藤朋子

信濃路の秋闌けにけりちぎれ雲
鳩のみの静かな広場冬紅葉
落葉積む露伴ゆかりの塔の跡
冬至風呂徳島産の柚子といふ
初灯明加賀の清酒を照らしけり
仏前へ寒九の鉢の水を供へけり
べらんダの鉢の大小雪明り

佐々木あつ子

採つてよき数を告げられ蝗採り
ふる里は柿の木のある門構へ
小春かな奏樂堂はこの辺り
鮫鱈を喰うて常陸の海荒るる
冬うらら富士みるために右の席
大湯祭駅から続く人の波
取り寄せる岩出山産凍み豆腐

佐藤稲子

砲台は昔のままに枇杷杷の花
シヤッターの開かぬ土産屋雪催
木の洞に祀るお地藏冬日向
冬日さすブロック塀にすずめかな
田作りでなまえを描く男の子
初手水子等真剣にやりけり
初湯にも残りし柚子を入りにけり

筵へと蕎麦干す昼の来たりけり
蕎麦刈や半伏せの茎起こしつ
あての木に初雪留む能登の路
香林坊に初雪の来てつきづきし
千枚田日本海より大雪来
大年や赤き閻魔の塵払ふ
年籠りカウントダウンもやつてみせ

眞田忠雄

霜月や八重子は新橋演舞場
托鉢の顔を見せざる夕時雨
湯の中に我が足見ゆる年の宿
土いぢり金沢ははや雪といふ
引越しの癖なほりたる雑煮かな
深爪の痛みみや庭の初氷
地下室で箔打ち始む加賀の春

柴崎和男